

川端康成の信濃——信濃に「故郷」を見る試み——

堀内 京

Ⅰ 信濃に着目する意味

川端康成の代表作「雪国」は、昭和九年末から執筆が開始され、複雑な成立過程^{〔1〕}を経た作品として知られている。簡単に確認すると次のようになる。昭和一〇年一月から一二年五月まで各雑誌に分載されたものと現在日本近代文学館に所蔵されている肉筆原稿の一部を書き足して、昭和一二年六月に一度刊本にまとめられた（旧版『雪国』創元社、昭和二年六月）。それから「三年半の空白期間」を経て、昭和一五年一二月から二二年一〇月まで四回にわたって雑誌に分載されたものが旧版『雪国』に書き足され、さらに改稿されて昭和二三年に再度刊本としてまとめられた（決定版『雪国』創元社、昭和三三年二月）。現在、最も広く流布している「雪国」は、この昭和二三年に刊行された内容を踏襲している。つまり、「雪国」

という作品は、昭和一〇年代を貫き、さらに敗戦を挟んで書き継がれた。さらに、この作品は、川端康成の生涯を貫いて執筆されたということもできる。定本は、昭和四六年に刊行（定本『雪国』牧羊社、昭和四六年八月）されており、川端の死後には遺稿「雪国抄」^{〔2〕}が発見されている。この遺稿「雪国抄」の執筆は、昭和四四年、ほるぷ出版から川端作品の「筆書きの自筆のもの」^{〔3〕}を出版したいと依頼されたことに起因する。「筆で書くなら、やはり『伊豆の踊子』が限度ではありませんか」^{〔4〕}という意見が出るなかで川端は「雪国」を選択し、遺稿「雪国抄」を執筆している。この遺稿「雪国抄」は、「雪国」の初出の冒頭三回分を抄出したうえに大幅に削除を加えたものである。藤田圭雄^{〔5〕}によると、この遺稿「雪国抄」が書かれたのは川端の死の直前にあたる。よって、「雪国」という作品は、敗戦を挟んで書かれた、という事実とともに、断

統的ではあるが、川端康成が生涯をかけて書き続けた小説だということがいえる。

前置きが長くなってしまったが、このように「雪国」の成立過程とともに川端康成の「年譜」を確認していくと、興味深い事柄がいくつか浮上してくる。そのなかでも、今回特に注目する点は、川端康成（川端作品）と信濃の関係性である。なぜなら、「雪国」の執筆が中断された「三年半の空白期間」に、川端は信濃に足繁く通い、その時期の川端作品では信濃に「故郷」を見る試みが行われていると考えるからである。三島由紀夫によつて「永遠の旅人」と評された川端には、「伊豆の踊子」や「古都」など旅先の土地の名前が付された作品がいくつもある。川端の生涯において、その旅の行き先は国内外を問わず広汎な地域に及んでいるが、昭和一〇年代の前半に足繁く通い、描いたのが信濃だった。信濃を描いた作品には、「花の湖」（「若草」昭和二年一月〜六月）「牧歌」（「婦人公論」昭和二年六月〜三年二月）「高原」（「文芸春秋」昭和二年一月他）「父母」（「改造」昭和二年一月）「百日堂先生」（「文芸春秋」昭和二年一月）「日雀」（「文芸春秋」昭和二年七月）「ゆくひと」（「婦人公論」昭和二年一月）「義眼」（「文芸春秋」昭和二年一月）「山の音」（「改造文芸」昭和二年九月他）「夕焼け」（「中央公論」昭和二年一月）などが挙げられる。エッセイ

においても「神津牧場行」（「スキート」昭和二年一月）「面替行の日」（「文学界」昭和二年一月）「平穏温泉だより」（「文学界」昭和二年二月）「信濃の話」（「文学界」昭和二年一月）「戸隠山にて」（「文学界」昭和二年一月）「旅中」（「文学界」昭和二年六月）「秋山居」（「オール読物」昭和二年二月）「日本の母」（「読売報知」昭和二年一月三〇日）「秋風高原」（「風景」昭和二年一月〜三年二月）などがある。このように見ていくと、「山の音」、「夕焼け」は、戦後に執筆されたものであるが、信濃に関する執筆は昭和一〇年代中頃までに多くみられ、それは「雪国」の執筆が中断していた「三年半の空白期間」と重なる。日中戦争が勃発し、世の中が大きな変遷を迎えたこの時期に、川端はなぜ信濃に向かい、信濃に「故郷」を見ようとしたのか。そして信濃というトピスを經由して「雪国」が書き継がれたことにはどのような意味があるのか。これらの疑問を本稿では考えてみる。

次に川端と信濃の接点を具体的に確認していきたい。

II 川端康成と信濃

当初、川端康成にとって信濃は幼少期を過した場所でもなければ学生時代を過した場所でもなく、まさに旅先であった。

それが昭和一二年には軽井沢に別荘を構えるまでになっている。

信濃を舞台とした作品を確認する前に、川端康成が信濃とどのように接点を持ったのかという点を時系列に並べ、確認していく。川端と信濃との関係性を論じたものには川俣従道『川端康成と信州』（あすか書房、平成八年二月）という優れた業績があり、この論考には多くの教示を受けた。川端の信濃に言及したエッセイ、三七巻本『川端康成全集』第三五巻（新潮社、昭和五八年二月）所収の川端香男里編「年譜」や書簡、川端夫人・川端秀子『川端康成とともに』（新潮社、昭和五八年四月）、先の川俣従道の先行論などを頼りに、「雪国」の執筆が中断された「空白の三年半」の間の川端と信濃の接近について整理してみることにしよう。

川端の初めての信濃行きは昭和六年八月に確認することができる。『川端康成全集』「年譜」の「昭和六（一九三二年）三十二歳」のところには、「八月、草津、軽井沢へ旅行（同行者は、菊池寛、久米正雄、直木三十五、池谷信三郎、菅忠雄、横光利一、岸田国士、福田蘭童）、北軽井沢の岸田国士別荘に立ち寄り」とある。この初めての軽井沢行きに関する川端の文章は管見のところ見当たらない。川俣従道⁶によると、川端と信濃との次の接点は、小説「花の湖」の取材のために訪れた昭和一一

年三月のことだという。その後は、昭和一一年八月に確認することができる。三七巻本『川端康成全集』「年譜」の「昭和十一年（一九三六年）三十七歳」のところに「八月二十八日、『文学界』の広告主である明治製菓の斡旋で神津牧場へ行く。翌日、軽井沢へ下り、そのまま九月まで軽井沢の藤屋で仕事をする。これ以後信州への関心が高まる。十月から十一月にかけて一ヶ月以上、信州各地を旅しつつ原稿を書く。」とある。この昭和一一年八月の軽井沢行きについては川端のエッセイ「神津牧場行き」に詳しく言及されている。八月二十八日に牧場に一泊した川端夫妻と同行した松坂屋美容部芝山みよか女史夫妻は、翌二九日に旧軽井沢へ歩いて出発する。その時の日程は、エッセイ「軽井沢だより」（『文学界』昭和一一年一〇月）で以下のように説明されている。

かくて八月二十八日出発、下仁田から牧場に登り、翌日は七曲越え軽井沢へのハイキングを決行した。僅か四里、女子供でも歩ける山路を「決行」とは大袈裟で、深田君や小林君等の山男から見れば、物笑ひであらうが、ハイキングの処女作としては、先づ芥川賞候補である。

（中略）

夕方前に旧軽井沢へ着き、つるやは満員と断られ、少

し手前の藤屋といふのに泊った。ここにも部屋がなく、山歩きの学生用といふ、三階の妙な部屋に通された。

神津牧場から旧軽井沢へ来た川端一行は「つるや」には断られ、「藤屋」へ宿泊することになった。この後もたびたび川端が逗留する「藤屋」との縁はここから始まる。「軽井沢だより」では、「軽井沢へ迷ひこんで来たんですねと、さつき河上徹太郎君に云はれたが、全く迷ひこんで来たといふ感じだ。かねて想像する、夏の軽井沢は虫が好かぬところで、そこに落ちついて仕事することにならうとは、夢にも思つて来なかつた」と明かしている。ところが、「少し慣れてみると、このブルジョア的国際避暑地が面白くなつて来さうだ。」と避暑地という軽井沢の空間を楽しんでいる素振りが読み取れる。またエッセイの終わりには、「追分の油屋には、堀辰雄君等の「四季」の詩人達が、昨日から集つてゐるはずである。これらの友人を訪ねたくなつた。来夏は早くから来て、会話でも習つてみようか。」と来夏の軽井沢訪問に意欲をみせている。この「軽井沢だより」からは「虫の好かぬ」ところであつた軽井沢を徐々に好意的に捉えていく川端の心情を読み取ることが出来る。初めての「藤屋」逗留は二週間に及んだ。この軽井沢との出会いがのちに「高原」を書く契機にもなつたの

だろう。

神津牧場を訪れ、軽井沢の「藤屋」へ滞在した川端は信濃への興味が益々増していき、再来の機会はすぐに訪れた。三七巻本『川端康成全集』「年譜」には、「藤屋」に二週間逗留後、一度信濃を離れるものの、翌月すぐにまた信濃に戻ったことが記されている。「十月から十一月にかけて一ヶ月以上、信州各地を旅しつつ原稿を書く。」とある。この昭和十一年一〇月から一月にかけての信濃への旅では軽井沢に限らず、信濃の温泉場を四〇日間も転々とする。注目すべきことは、このときの旅程が「牧歌」に描かれている信濃と重なりを見せる点である。川端秀子『川端康成とともに』を参照し、旅程（宿泊先）を整理すると次のようになる。（「」の引用は川端秀子夫人によるもの。）

一〇月一六日下諏訪・一七日浅間温泉・一八日松本郊外御母家温泉・一九日湯田中・二一日下高井郡平穏村神林温泉の塵表閣「ここが大変気に入つて十一月初めまでいることになります」とある。一一月六日秀子夫人が長野に行き川端と合流し、戸倉上山田の瀧の湯に宿泊・七日秀子夫人の母が長野を訪れ、川端、秀子夫人、秀子夫人の母と三人で善光寺参り。八日戸隠中社の宿坊「久山」戸隠のこのあたりには、昭和十一年初旬主人と私が一度来ておりますが、その後主人は信州

から帰る直前に裾花川に沿って鬼無里村の鬼女紅葉の伝説のあとを求めて歩いたようです。」九日（二〇日）に夫人は鎌倉へ帰る）（一九日別所温泉柏屋別荘・二〇日戸倉上田温泉上田館・二一日長野善光寺近くの小妻屋。川端が鎌倉に戻った日付の詳細は不明だが、この後すぐに鎌倉に戻っているであろうと推測される。

極めて簡単に川端の昭和十一年一〇月から十一月にかけての旅程を確認しただけに過ぎないが、ここから一つ重要なことが見えて来る。川端は、信濃を南から北、東へと移動している。「牧歌」は、信濃を北から南へと描き、川端の旅程とは裏返し構成をとっているが、訪問した土地はそれぞれ重なっていることがわかる。そして牧歌の「作者」が戸隠や諏訪を訪問する季節も川端の信濃訪問のそれと重なっている。この信濃訪問は川端が「牧歌」を執筆するための「勉強」の機会となった。

翌年昭和十二年六月から「牧歌」の連載（昭和十三年二月まで）が始まる。川端は七月二八日に軽井沢入りし、藤屋を一室一夏二百円で借りる。八月二四日軽井沢集会堂で「文学」と題し講演。（のち「信濃の話」として「文芸」一〇月号に掲載。）八月末軽井沢から戸隠中社へと行く。秋には文芸懇話会賞による賞金で軽井沢の桜沢（通称ハッピーバレー）に別荘を購入し

た。この年は、十一月二六日に鎌倉に帰っている。さらに次の年の昭和十三年四月には再び戸隠を訪ねている。

III 信濃に故郷を見ること

川端の昭和十一年一〇月から十一月にかけての信濃訪問を中心に確認してきた。川端が信濃を舞台として書いた初めての長編小説は「牧歌」（婦人公論）昭和十二年六月（一三年三月）である。この「牧歌」は、三章だてになっており、旅人の「作者」が信濃全域を歩き展開される「信州見聞記風な長篇小説」である。初出時の第二章のみが抜粋され、独立したかたちで「戸隠の巫女」として複数回刊本に収められた。初出の全体が「牧歌」として刊本に収録されたのは、戦後に刊行された『川端康成全集』第八卷（新潮社、昭和二十四年二月）においてである。このような発表の仕方から鑑みても、「牧歌」の中心は初出時の「戸隠の巫女」であると考えられる。「日華事変が勃発した」と作中にあるように、「牧歌」には信濃というトピックスと時代背景が色濃く描かれている。注目すべきことは、「牧歌」における「故郷」という言葉の描かれ方である。「故郷」は、信濃に「日本の故郷」を捜しに来る「作者」と、故郷の戸隠を出て行くこうとしている戸隠の神官の娘の知子との

会話の中に明白に現れる。

「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしてゐるんですね。」と、知子はぼつりと言つた。そして、遠い山を見た。

「私は故郷を出て行かうとしてゐるのに……。」

御神楽を見て、自分の幼い巫女の頃を思ひ出して、つい恥が濡れて来た、その照れ隠しの言葉とも聞える。

「故郷が書けたらいいが、まあ、あの故郷も、この故郷も、ただ素通りして歩いて、死ぬことでせうね。つくづくあさましい根性ですよ。」(中略)

「ええ。兄は、戦地で、反つて日本の故郷を見つけてゐるかもしれませんわ。さつき私、講中の方々を見てゐて、この方々の子供さん達と同じ兵隊に出てゐることは、兄の為にしあはせだと思ひましたの。戦争の時は、みんな一緒ですもの。あの講中の方々は、肉親を国の犠牲にして、あんなに黙つて、古い神の前に坐つてらつしやるんですわ。知らずに疑はずに……。」

「そんな―あんたも都会人の見方をしてゐる。」

「作者」が信濃を訪れた理由は「日本の故郷」を書くため

だということが知子によって明かされる。知子の兄は、「二・四事件の左傾小学校教員」であるという過去があり、小学校教員を辞めたのちは長野で果樹園を営んでいた。「牧歌」では「作者」が「日本の故郷」を希求し、戸隠に向かうが、その「作者」とは反対に、知子は戸隠を出て行こうとしている。そして知子は兄が「戦地で、反つて日本の故郷をみつけてゐるかもしれ」ないという。これは、「左傾小学校教員」であつた兄は信濃では教職に戻ることもできずに、果樹園で過していたが、戦地に赴くことで「みんな一緒」になることができると知子が考えていることの表れである。この知子の言葉に「作者」は「あんたも都会人の見方をしてゐる。」という不満を述べる。見逃してはならない点は、知子によって「作者」の希求する「日本の故郷」は信濃には既に存在し得ないことがはつきりと伝えられることである。「牧歌」第二章「戸隠の巫女」の終りでは、ひと冬を越えたあと、「作者」が戸隠を再度訪ねると、知子からの葉書が美ヶ原から送られて来たことが明かされており、神官の娘として戸隠で育てられた知子も既に「故郷」の戸隠を離れたことが暗示されている。

「牧歌」の第三章は「ふるさとのうた」と題されている。知子によって戸隠には「日本の故郷」が存在しえないことを明確に突きつけられた「作者」は、「ふるさと」を求めて、南

信濃を訪れる。しかし、「牧歌」の第一章にあたる序章「信州教育」と同様に、郷土に関する資料が大量に引用され、「故郷」や「ふるさと」が描かれることはなく、「牧歌」は中絶という形で作品が終わってしまう。

川端は「牧歌」連載の途中から軽井沢を舞台にした「高原」の執筆を始める。「高原」は支那事変の始まった年の夏を書いてゐる⁸⁾と説明されている通り、作中には「牧歌」と同じ時期の時代背景があると考えられる。「高原」は避暑地という軽井沢の特異性が前面に押し出され、様々な人種が「雑居」した空間が描かれている。「高原」のなかにも「故郷」という言葉が見られる。次の場面は須田と洋子の会話である。

「二世なんかはここへ来て、故郷へ帰つたやうな気がするかもしれないね。」

「でも、幸福つてものがあるんでせうか。」

と言ひながら、洋子はちよつと頬を赤らめた。

「ないやうな気がなさいませんか？」

「混血児に近いですからね。しかし、世界中が混血児ばかりになつたらどうですか。遠い未来には、さうなるかもしれませんよ。」

「おお、厭だ。」

と、洋子は快活に首を振ると、藤の蔓につかまつて、水際をくると渡つて行つた。

様々な人種が雑居する軽井沢が「二世たち」にとっては「故郷」のような役割を果しているかもしれないと考える須田に對して、洋子は彼等と近い存在として例えられている「混血児」が世界に溢れることを否定している。夏の間だけ過す避暑地という性格上、やはり軽井沢も「故郷」としては成立することはない。

「牧歌」「高原」と二編の小説を確認してきたように、「雪国」の執筆が中断された「三年半の空白期間」には、川端の視線は信濃へと向けられ、信濃に「故郷」を描く試みが行われた。しかし、その試みは達成したとは言い難い。このような川端の試行は、「私の作品のうちでこの『雪国』は多くの愛読者を持つた方だが、日本の国の外で日本人に読まれた時に懐郷の情を一入そそるらしいといふことを戦争中に知つた。これは私の自覚を深めた。」⁹⁾と振り返っているように、旧版『雪国』が「日本の国の外」で「懐郷の情を一入そそ」つたということとも決して無関係ではないように思う。「長野県は満州移民を最も多く送り出した県」¹⁰⁾であつた。川端は「信濃は郷土の研究といふことが全国第一に發展してをりまして、

文献も多いし、便利なのですが、そして郷土を知ることとは日本を知ることにもなる^⑪と実存する特定の場所^⑫信濃を故郷として描くことを試みたが、その試みを果たすことは叶わなかった。その結果、「旅人」川端は、昭和一二年に一度刊本にしながらも地名を捨象して描いた「雪国」の世界に戻り、生涯を通じて「雪国」を書き続けたということも考えられるだろう。

戦後に発表された「山の音」の結末では尾形信吾が「「どうだね、この次の日曜にみなで、田舎へもみぢ見に行かうと思ふんだが」」と提案するこの「田舎」は信濃を指している。しかし、「山の音」は鎌倉が作品舞台であり、信濃に故郷を描く具体的な試みは既に見られない。

信濃は、川端にとって生まれ育った場所でもなければ三〇代になるまで縁もゆかりもなかった場所であった。にもかかわらず、「信濃を勉強」して「信州見聞記風な」「牧歌」や軽井沢の避暑地という場の特性を前面に押し出した「高原」を執筆し、信濃に「故郷」を見ようとした。信濃をくぐり抜けて、「雪国」の執筆を再開したことは興味深い事実として確認でき、川端文学史においても信濃というトポスの果たす役割は決して見逃すことができないのである。

注

(1) 「雪国」は次のように発表され、成立した。

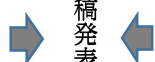
- ① 「夕景色の鏡」(「文芸春秋」昭和一〇年一月)
- ② 「白い朝の鏡」(「改造」昭和一〇年一月)
- ③ 「物語」(「日本評論」昭和一〇年一月)
- ④ 「徒勞」(「日本評論」昭和一〇年一月)
- ⑤ 「萱の花」(「中央公論」昭和一一年八月)
- ⑥ 「火の枕」(「文芸春秋」昭和一一年一〇月)
- ⑦ 「手毬歌」(「改造」昭和一二一年五月)
- ⑧ 「肉筆原稿」

…雑誌に未発表分の肉筆原稿(四〇〇字詰め原稿用紙)

六枚半(日本近代文学館所蔵)

⑨ 旧版『雪国』(創元社、昭和一二一年六月)

続稿発表まで三年半の空白



⑩ 「雪中火事」(「公論」昭和一五年二月)

⑪ 「天の河」(「文芸春秋」昭和一六年八月)

⑫ 「雪国抄」(「晩鐘」昭和二一年五月) ↓ 「雪中火事」の改稿

⑬ 「続雪国」(「小説新潮」昭和二二年一〇月) ↓ 「天の河」

の改稿

⑭『決定版雪国』（創元社、昭和三年二月）

⑮牧羊社版『雪国』（牧羊社、昭和四六年八月）↓現行の定本

⑯遺稿「雪国抄」（「サンデー毎日」昭和四七年八月一三日）

↓川端の死後に発見された「雪国」の初出「夕景色の鏡」から「物語」までが書かれた毛筆書の抄。

（2）これは注（1）の⑯にあたる。遺稿「雪国抄」の発表は、「サンデー毎日」（昭和四七年八月一三日号）。遺稿「雪国抄」については平山三男『遺稿『雪国抄』影印本文と注釈・論考』（至文堂、平成五年九月）に詳しい。

（3）「遺稿発見 全文掲載 川端康成 消えた葉子の『雪国』（「サンデー毎日」昭和四七年八月一三日号）では、川端が遺稿「雪国抄」を毛筆で書いた経緯について「ほるぷ出版（東京都千代田区麹町三）の代表取締役、荒井正大氏は、日本の近代・現代を代表する作家の後世に残る作品をあつめた豪華本選集を計画していた。川端作品は、ぜひ毛筆書きの自筆のものをそのまま復刻したいというのが荒井氏の気持ちだった。」とあり、川端に毛筆書き自筆原稿の依頼があつたことが明かされている。

（4）注（3）に同じ。「荒井氏は鎌倉の川端邸へ呼ばれた。「筆で書くなら、やはり『伊豆の踊子』が限度ではありませんか」という同氏に、川端氏は黙って『雪国抄一』と表紙のついたノートを見せた。」とあり、

川端が毛筆書き自筆原稿を書く際に「雪国」を選択し、抄出したものを書いたことがわかる。

（5）藤田圭雄「毛筆本『雪国抄』について」（『日本名作自選文学館』ぼるぷ出版、昭和四七年十二月）には遺稿「雪国抄」執筆の経緯が詳しく述べられている。

（6）川俣従道『川端康成と信州』（あすか書房、平成八年一月）

（7）川端康成「改造社版『川端康成選集』第九巻あとがき」（改造社、昭和十三年十二月）

（8）注（7）に同じ。

（9）川端康成「あとがき」（『雪国』創元社、昭和三年二月）

（10）小林信介『人びとはなぜ満州へ渡ったのか 長野県社会運動と移民』（世界思想社、平成二七年三月）

（11）川端康成「信濃の話」（『文学界』昭和二年一〇月）

*「牧歌」「高原」の本文の引用は三七巻本『川端康成全集』第六巻（新潮社、昭和五六年四月）による。引用文中の傍線はすべて引用者による。